書　評

堀博.『メコン河——開発と環境』古今書院，1996，xxiv＋476 p.

この大著は，その後半生をメコン河にかけたあるエンジニアの「遺書」である。1919年生まれの著者，堀博博士は，前書きの中でそう述べている。これが意味するところは，後で述べよう。

「メコン」にはどこかロマンを秘めた響きがある。流域の自然，民族，文化のみならず，複雑で，ときに悲劇的な社会・政治史に対する愛着と関心が，このロマンを醸成するのであろう。日本の水工エンジニアにとっても，私も含めて，この河は特別の意味をもっているようである。それは，メコンが，戦後日本の最初の国際貢献の舞台になったことと関係している。1958年暮，できたばかりのメコン委員会（Mekong Committee）から，日本に対して，全支流の開発ポテンシャルを踏査してほしいという，調査プロジェクトがもたらされた。時の日本工営社長久保田豊氏を総大将として，電源開発株式会社などから選ばれたエンジニアたちが勇躍して参加し，2年間調査研究に没頭したという。

1961年に提出された大きな報告書には，支流のもつ莫大な水力発電ポテンシャルの調査結果に加えて，実は，頼まれてもいない，メコン本流を制御する壮大なダム群の計画が盛りこまれていた。日本人の考えた本流計画は，あたかもアメリカのTVAモデルをメコンに植え付けようとするかのように，クラチエからルアンプラバンまでダムの階段を設けて，洪水制御，発電，水運，灌漑を同時に行い，流域の経済をまるきり変えてしまおうという，夢のような計画であった。これを実現するためには，関係沿岸国ラオス，タイ，カンボジア，ベトナム4カ国の協力・協調が必須であるという，いわゆるメコン・スピリットが強調されもした。

TVAやメコンの「大きいことはいいことだ」という開発理念は，1970年代に入ると急速に萎んでゆき，「小さいことこそ素晴らしい」という，パラダイム変換が起こった。大きなダムによる水没住民の移転などという扱いにくい問題に対処しがたく，またいわゆるエコロジストの牽制も受けて，エンジニアが自信を喪失していった時期であった。加えて，インドシナ戦争の激化，終結，カンボジアの悲劇，3カ国の社会主義体制，そして再び自由主義経済への移行と，政治経済状況が目まぐるしく変動するなかで，メコン委員会は結局指導力を発揮することができず，単に国別の細々とした関連事業だけが進められてゆくのを座視する他はなかった。

メコン本流計画の眼目とされてきたビエンチャンのすぐ上流のパモンダムにしても，流域全体の総合開発への効果を考えると満水面標高250メートルの線は譲れないと，1970年代の終わりごろまでは私たちエンジニアは信じてきたのだが，水没地補償やその他の環境への影響を考慮して，それが240, 230, 210メートルと落とされてゆき，今や貯水をあきらめて流込み式発電を採りいれようとの計画に落ち着こうとしているありさまである。メコンデルタが欲している乾季の流量増強とか，カンボジアの洪水と旱魃を少しでも和らげる見通しを与えるとかの，そんな夢は消えたのであろうか。

さらに，1990年代以降は，タイを中心とする爆発的な経済成長の余波がメコン流域にも押し寄せつつあり，メコンの資源がビジネスの対象として取り引きされようとしてもいる。ここで要求されている「メコン」は，ややひがみっぽく言うと，単に水力電気を取りだし，また拠点大都市間交通の回廊を提供するだけの地域であるかのようである。

1995年，メコン委員会はより強力な機構として改組され，Mekong River Commissionと名を替え，近い将来中国とミャンマーを参加させる構えである。初代事務局長には日本の農林水産省の高級技官を送り込むことに成功した。日本のエンジニアが再び奮い立つ条件も揃ってきた。ここで，新しいメコン委員会は，どのようなメコン・スピリットを掲げ，流域全体の発展のためにどういう舵とりをするのであろうか。

ここまで，書評の枠をいささか逸脱するような文章を列ねてしまった。これは，著者堀博氏が，上の全期間を通じ，また全てのトピックにわたって身をもって参加し，それを本書で詳しくドキュメントしているからでもある。実は私も著者に少し遅れてメコン委員会事務局に30年間ほど勤務した経験をもつものだから，著者の文章に私自身の思いを重ねて，メコン開発の40年史を圧縮して記

してみると，上のような文章になってしまった。

本書は次の6章からなる。(　)内はページ数。

第1章　メコン河とその流域（37）
第2章　下流域の資源開発の概況と将来性（37）
第3章　下流域のダム開発計画——その変遷と国際協力（127）
第4章　上流，瀾滄江とその本流ダムの開発（25）
第5章　ダム開発の環境問題——熱帯大陸河川の場合（172）
第6章　新メコン委員会の設置と今後の開発（57）

章だてのタイトルだけをみると，なにやら官庁文書風で，どうもいただけないが，内容は極めて精緻で，かつ重い。

著者自身は，本書の中心は第5章の環境問題にあり，ここで著者の思いのたけが語られているという。ちなみにこの部分は，東京大学に提出した博士論文のハイライトだとのことである。しかし私には，むしろ第3章におけるメコン開発計画の徹底的な検証と，第6章の新しいパラダイムや最近の流動的な状況を詳しく綴った部分がより魅力的である。このために本書がメコン開発の「標準書」になりえていると思うからである。

何しろ，著者は1955年フルブライト留学生として渡米して TVA に代表されるアメリカの河川総合開発の感覚を磨き，1959年から2年間は冒頭で述べたメコン支流開発調査に参加し，1964年から68年まで4年半メコン委員会事務局に勤務して流域開発のマスタープランを仕上げ，その後もアジア開発銀行や UNDP ニューヨーク本部からメコンを見守る傍ら，時に応じてメコン委員会のコンサルタントとしてマスタープランのレビューなどをこなしてきた人物である。そんな人が，メコン委員会その他の膨大な論文・報告書・資料などを驚くほど丹念に読み込んで書いたメコン開発40年史（第3章と第6章）に，迫力のなかろうはずがない。原典の多くが官庁文書のせいか，この部分は決して読みやすくはないが，ずっしりとした手ごたえがある。

先に述べたように，第5章（環境問題）はより学術的である。メコンの事例に加えて，ナイルのアスワンハイダムや諸外国の事例研究を渉猟し，以下の要素をとりあげて解説している。自然環境変化として，ダム湖面蒸発，ダム湖漏水，貯水池築造と地震，ダム湖岸崩落，ダム湖の水温，富栄養化，堆砂，ダム下流の河川変化，デルタと河口部への影響，漁業への影響，野性動物への影響など。さらに，社会環境変化にも目を配り，水没移住の問題，遺跡の水没喪失，観光開発，それに水関連疾病が論じられている。これらは，40年間も調査ばっかりやってきた（?）メコン委員会がもっとも誇りとする研究成果であり，私も，ひょっとして世界でもっとも進んでいるのではないかと思っている。

著者のメコンへの想いは第6章でもっとも強く吐露される。それは質の高い提言のかたちをとる。例えば，こうである。

「河川がエネルギー開発という単一目的で一面的に評価され計画され，経済的見地からのみ開発されたのでは，川が泣く」，「(フランスなどが勧める）流込み式低ダムによる本流開発案を採用してしまうと，もはや従来から期待されているデルタの洪水をコントロールすることも，タイ東北部の灌漑に資することも一切できなくなる」，しかし，「タイ東北部灌漑のための，（タイ単独の）メコン—チー—ムーン取水計画は，直接メコン河の水を減少させる暴挙だ」。「新しいメコン委員会は，水文観測にとどまらず，水文監視・査察制度をとりいれよ」，「新しいメコン委員会の諮問委員会には，学者の起用は好ましくない。実際にアジアの国際河川の総合的開発計画を策定した経験をもつ者を中心に」，「計画の調整はすべて新しいメコン委員会を中心に」と，提案は具体的である。

「新聞の見出し的な『メコン流域に商談の季節到来』というような安手のスローガンに踊らされてはならない」，「大切なことは，6カ国の政府がそれぞれエゴイスティックな経済発展を願わず，経済だけでなく，むしろ安定した社会の構築を心がけ，心のありかたと個人の生活を大切に想う生き方を選択することだと思う」。

水工エンジニアとして若いときからダム開発の現場に立ち，いくつもの大きな河川総合開発を手掛け，環境問題と政治経済的な国際紛争に揉まれる中で到達した「開発観の高み」からの発言である。後事を託す若い世代に，このことだけは書き遺しておきたかったに違いない。「遺書」と言った所以であろうか。及ばずながら，私も後塵を拝して行こう。

（海田能宏・東南ア研）